

氏 名 (本 籍)	高 ^{たか} 橋 ^{はし} 健 ^{たけ} 夫 ^お (京 都 府)		
学 位 の 種 類	博 士 (体育科学)		
学 位 記 番 号	博 乙 第 1,446 号		
学位授与年月日	平 成 10 年 7 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
学 位 論 文 題 目	体育授業改善のための実践的条件に関する研究 ープロセス・プロダクト研究システムを適用してー		
主 査	筑波大学教授	教育学博士	片 岡 暁 夫
副 査	筑波大学教授	体育学博士	飯 田 稔
副 査	筑波大学助教授	博士 (体育科学)	中 込 四 郎
副 査	筑波大学教授	教育学博士	渡 辺 光 雄

論 文 の 内 容 の 要 旨

1. 論文の構成

本論文は、序章、1章～5章、結章からなっている。400字原稿用紙に換算して746枚相当のものである。

2. 論文の内容

本論文の研究目的は、体育授業過程の指導行動、学習行動及び指導スタイルを観察記述し、これらの行動と子どもの授業評価との関係を分析することによって、子どもが評価する「よい体育授業」に現れる行動的特徴を明らかにすることである。あわせて、一連の研究結果にもとづいて、子どもが評価するよい体育授業を実現するための実践的条件について検討することである。

研究方法として、プロセス・プロダクト研究システムを適用している。プロダクトについては、著者が開発した「子どもによる形成的評価法」を用い、プロセスについては、いくつかの組織的観察法によって観察記述している。研究対象となった体育授業は小学校が中心であるが、いくつかの研究では中学校・高等学校の体育授業も対象にしている。

第1章では、小学校児童用の「体育授業評価法」を開発している。研究課題1では、単元全体の授業を評価する「診断的・総括的授業評価法」を、研究課題2では、1授業時間を評価する「形成的授業評価法」を開発している。双方とも因子分析によって類似した因子を抽出しているが、特に後者の研究では、「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」の4次元・9項目からなる調査票と診断基準を作成している。これらの評価法は、現在文部省が指導要録で提示している観点別評価にうまく対応するものである。

第2章では、子どもの学習行動と授業評価との関係を分析している。研究課題1では、授業過程の学習行動をALT-PE観察法によって観察記述するとともに、形成的授業評価との関係を検討している。その結果、体育授業は大変無駄な時間が多く、いかにして学習時間や運動学習時間を確保するかが、よい体育授業を生み出すうえでの重要な実践的条件になることを明らかにしている。研究課題2では、子どもの属性である運動技能及び運動の愛好的態度と学習行動 (ALT) との関係を分析し、技能の低い生徒や態度の低い生徒の学習行動が消極的になることを実証している。研究課題3では、授業過程での集団的・情意的行動と形成的授業評価との関係を分析し、これらの行動の出現頻度と授業評価とが有意に関係することを明らかにしている。

第3章では、教師の指導行動と子どもの形成的授業評価との関係を分析している。まず、研究課題1では体育授業過程での教師行動の全体構造を捉え、直接的指導、マネジメント、巡視、相互作用を4大教師行動と規定し、

相互作用のみが授業評価に肯定的に作用することを明らかにしている。研究課題2では、相互作用に焦点を当て、相互作用の質・量と子どもの学習行動（ALT）や授業評価との関係を分析し、個々人の運動学習に対する肯定的・矯正のフィードバック及び励ましが授業評価と有意に関係するという結果を得ている。研究課題3では、上記の相互作用の有効性を中学校の授業を対象に介入実験授業によって確かめている。研究課題4では、相互作用の表現のしかたに着目し、双向性、伝達性、共感性の観点から評価できる相互作用は子どもの授業評価に有効に作用することを明らかにしている。さらに研究課題5では、相互作用と子どもの受けとめかたとの関係を分析し、運動学習に対する肯定的・矯正のフィードバックが子どもの受けとめかたや授業評価に有意に作用することを明らかにしている。

第4章は、体育授業で適用される指導スタイルと形成的授業評価との関係を分析している。研究課題1では、授業を実施した教師の意識から適用された指導スタイルを特定し、授業評価との関係を分析している。その結果、「間接的指導型」において最も評価が高くなる傾向を見出している。研究課題2では、授業のイニシアティブに着目して観察法を開発し、これを適用して観察記述するとともに、授業評価との関係を分析している。その結果、先の研究とほぼ同様に、教師に導かれた「生徒主導型」の有効性を確認している。

第5章では、2章、3章、4章で得た研究結果を整理するとともに、これらの結果にもとづいて子どもが評価するよい体育授業の実践的条件について考察している。そこでは、①マネジメントや直接的指導場面を減らし、子どもの学習時間量をできるだけ多く確保すること（授業の勢い）②子ども同士の肯定的関わりを促進すること（肯定的人間関係）③教師が積極的に相互作用を営むこと（教師の相互作用）④子どもが自発的に学習できる指導スタイルを適用すること（子ども主導的学習）⑤学習意欲を喚起し、学習成果をもたらす教材を提供すること（教材づくり）の5点をよい体育授業の基礎的条件として特定し、それぞれの条件に関わった指導技術や指導方略のありかたを考察している。

最後に、今後の研究課題として、本研究で適用した組織的観察法による分析や、多くの授業観察の平均値から導き出す一般的傾向の意義と限界を検討し、今後は単元レベルで授業を観察したり、質的な観察分析法を適用していくことの必要性を指摘している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、プロセス・プロダクト研究システムを適用した体育授業研究であり、オリジナルな多くの知見を生み出した著作である。本論文は、およそ15年間をかけて作成された20篇の原著論文・著書の成果にもとづいてまとめられている。膨大な体育授業が組織的観察法を用いて記述分析されており、また、これらのデータと標準化された授業評価法との関係から、授業成果を高めるうえで有効な指導技術や指導方略を明らかにしている。この研究によって導かれた知見は、体育授業実践の改善に有益な示唆を与えるものであるが、くわえて、本論文で開発・適用された方法は、今後の授業研究の科学化に大きく貢献するものである。以上のような点から高く評価できる論文である。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。